

# 任

五年

画数 6  
筆順  
オン  
フ

仁 任 任  
ニ  
まかじせる 任す

成り立ち



妊娠して、おなかが大きい人のすがたを表した「妊」と、「任」とを組み合わせて作った字です。

妊娠は、女の人に、「任」せられた、人として一番たいせつな「役目」です。それで、「たいせつな「役目」という意味に使われます。例大任、任務、責任、辞任、担任、留任。

「役目につく」という意味にも使われます。例任免、任命。

また、「任せる」という意味にも使います。例一任、委任、任意。

使い方

▽わたしは、おかあさんの留守中、妹の世話をすることを任されました。これは、わたしにとつては大任です。無責任なことをせずに、しっかりと世話をしなくてはなりません。ちよっぴり不安ですが、また、ちよっぴり得意な気もします。

▽運動会で、ぼくたちのクラスが何をするか、議論しました。なかなか結論が出ないので、議長に一任することにしました。

熟語例

- ▽大任 (大きな仕事。大切な役目)
- ▽任務 (その人に任せられた役目)
- ▽責任 (果たさなければいけない役目)
- ▽辞任 (つとめを自分からやめること。)
- ▽担任 (つとめとして、受け持つこと。とくに、クラスを受け持つことを言います。)
- ▽留任 (その役目をやめないで、留まること。)
- ▽任免 (役目につけることと、やめさせること。)
- ▽任命 (ある役目につくよう命じること。)
- ▽一任 (すっかり任せること。)

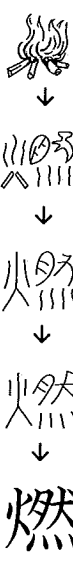
# 燃

五年

画数 16  
筆順  
オン  
ネン

も 燃える 燃やす 燃

成り立ち



もとは「然(4年564)」という字でした。

「犬」という字と、「肉」の意味の「犬」と、火のもえる形を表した「火」とを組み合わせて作った字です。

「火をもやし、犬の肉をやく」ことを表す字です。昔、中国では、野犬が多かったせいか、犬の肉がおもな食肉でした。それで、「犬の肉をやく」ことで、「火をもやし」意味を表しました。

しかし、「然」が「当然・必然・自然……」などと使われるようになったため、「然」に「火」を加えた「燃」を「火をもやし(もえる)」「意味の字にしました。」

使い方

▽むかしは木や炭を燃料にして、部屋を暖めたり、食事を作ったりしたものです。こういう燃料に火をつけるのは、大そう手間がかかりました。今は本当に便利です。

▽若いうちに情熱を燃焼させて何かをやるとするのは、大変よいことです。勉強でもスポーツでも、一つのことに向かって精一杯やるというのは、だれにとつても大切なことです。若い時は二度とないのですから、大事にしたいものです。

熟語例

- ▽燃料 (燃やして熱を出すための材料。石炭や石油、ガス、そして古い時代には、まきや炭が燃料として用いられました。)
- ▽燃焼 (燃えること。また心を燃やして、何かを精一杯やることを言います。前の方の例は、「ろうそくの燃焼のようすを調べる」などです。)
- ▽可燃 (燃やすことができること。「可燃物は、火に近づけないで下さい」などというふうに、つかいます。)
- ▽不燃 (燃えないこと。)